

家庭科教育の昭和史とともに生きる—宮原小治郎小伝

第一部 あるジャーナリスト

の生い立ち (10)

佐々木 享
(名古屋大学教授)

娘の結婚

第一次世界大戦(一九一四—一八年)の主戦場はヨーロッパであった。このため、日本資本主義はいわば漁夫の利を占め大きく成長した。近代的な工場が増加し、労働者階級も成長した。一九二〇(大正九)年五月二日には、日本最初のメーデーが開催された。この年、大学令による私立大学の設立が相次ぐなど、教育界も変化し始めた。

ところで、一九二〇(大正九)年に帰国した小治郎は、同年七月に、生家と同じ網掛の原寅之助に一人娘のさだよを嫁がせた。結婚に際して彼女が持参した品物の目録(原家所蔵)は、以下のごとくである。娘を嫁がせた小治郎の感懐の言葉は残されていない。この持参品は小治郎の愛情の表現だった

のかもしれない。大正期の信州の自作農の嫁入り支度を示す記録としての意味もあるので紹介しておく。

記

着物之部

一、縮緬参枚	壹重	一、コート	壹枚
一、白参枚	壹重	一、シヨール	壹枚
一、あずま	壹箇	一、紋羽二重	壹枚
一、縞縮緬	壹重	一、白縮緬長着	壹枚
一、絹更羅紗	壹重	一、友禅長着	壹枚
一、七々子更羅紗	壹重	一、唐縮緬長着	参枚
一、上田縞	壹重	一、ふらん長着	四枚
一、高貴織拾	壹重	一、丸帯	壹筋
一、絹更羅紗拾	壹枚	一、昼夜帯	九筋
一、紋附縮緬羽織	壹枚	一、夏帯	弐筋
一、紋附羽二重羽織	壹枚	一、綿入	参枚
一、高貴御呂羽織	壹枚	一、木綿綿入	八枚
一、銘仙羽織	壹枚	一、御召単衣	壹枚
一、瓦斯緋羽織	壹枚	一、単衣	九枚
一、絹更羅紗羽織	壹枚	一、モス夏襦袢	弐枚
一、御召羽織	壹枚	一、下着	七枚
一、木綿羽織	壹枚	一、前掛	七筋
一、祥天	壹枚	一、下帯	七筋

夜具之部

一、夜着	壹着	一、鏡台	壹箇
一、五縫布団	壹枚	一、洗面器	壹箇
一、二縫半布団	壹枚	一、鹽	壹箇
一、座布団	壹枚	一、雨傘	壹本
一、寝巻	壹枚	一、洋傘	壹本
一、枕	參箇	一、表附下駄	參足
其他		一、下駄	五足
一、紋附布呂敷	壹枚	一、上履	貳足
一、更羅紗布呂敷	壹枚	一、足袋	拾足
一、モス布呂敷	壹枚	一、手拭	七筋
一、軍笥	壹竿	一、コテ	壹挺
一、長持	壹本	一、尺度	貳本
一、手箱	壹箇	一、鍬	壹挺
一、針箱	壹箇	一、カミノリ	壹挺
小諸商業学校		以上六拾參点	

一九二〇（大正九）年九月、小治郎は長野県小諸商業学校
教諭兼舎監に任ぜられ再び教師生活に戻った。

これより以前、小諸には牧師木村熊二らの手で一八九三
（明治二十六）年に設立された小諸義塾があった。地域の青
年対象の中等程度の各種学校にすぎなかったけれども、若き
日の島崎春樹（藤村）がここで教師をしていたことから、近

代日本文学史にその名を遺している。後年、小治郎と親しい
交わりを結ぶ水彩画家丸山晚霞（一八六七〜一九四二）もこ
の学校で絵を教えていた。小諸義塾は、設立者、教職員熱
意と小諸町の多額の補助金で支えられていた。しかるに一九
〇六（明治三十九）年に至り、小諸町はこの補助金を打ち切
るとともに、自ら小諸町立小諸商工学校を設立したので、小
諸義塾は廃校となった。

小諸商工学校は商業部と女子技芸部とからなる乙種の実業
学校で、一九一一年より北佐久郡立となった。一九一九（大
正八）年四月には同校の女子技芸部は長野県小諸町立実科高
等女学校として独立したので、小諸商工学校は長野県北佐久
郡立小諸商業学校となった。さらに翌一九二〇年三月には、
同校は長野県小諸商業学校と改称し、同時に甲種商業学校に
改組された。小治郎は、同校が甲種商業学校に昇格した年の
九月に赴任したわけである。

小治郎は一九二二（大正十一）年八月には舎監の兼任を解
かれていた。

婦女新聞社員となる

小諸商業学校教師時代（一九二〇年九月〜二三年四月）の
小治郎の教師としての事績はほとんど分かっていない。他方、
小治郎の旅好きは相変わらずで、一九二二（大正十）年八
月には日本アルプスに登っている（『婦女新聞』第一一〇九

号)。この間の「婦女新聞」への「みやこ」の寄稿は、必ずしも多くなかったけれども、一九二二年、二三年の正月の同紙には、小治郎は社員として、一九二三年正月の同紙では客員として名を連ねていることが注目される。大和田建樹を共通の師として始まった信州の商業学校の小治郎と婦女新聞社長福島四郎との結び付きがいつそう強まったことは確かであるように思われる。婦女新聞社主催の夏期講習会に参画したこともその証である。

婦女新聞社主催の夏期講習会

一九二二(大正十一)年七月二十五日から三十一日までの七日間にわたり、婦女新聞社主催の二つの夏期講習会が東京で開かれた。はじめの六日間の午前が婦人文化講習会、午後が子供洋服手芸講習会で、最終日には宮城・宮城内養蚕室見学が行われた。婦人文化講習会の科目と講師は「新理想主義の哲学」(金子馬治)、「現代文芸思潮」(有島武郎)、「最近の倫理学」(杉森孝次郎)、「宗教の根本義」(中桐確太郎)、「法律及び法律学の進化」(穂積重遠)で、子供洋服手芸講習会のそれは、「子供洋服・附女教員体操服」(東京女高師の神田順子・高橋イネ子・寺尾きく子)、「タッチング・仏蘭西刺繍」(金沢しず子)で、ほかに科外が二科目あった(「婦女新聞」第一一五二号など)。定員四百名で会員を募ったところたちまち定員を超え、手紙や電報で断ったにもかかわらず、

結局六百余名が参加する盛況であった。

小治郎はこの講習会の世話役として重要な役割を演じていた(「婦女新聞」第一一六〇、六一、六二号)。以後、一年間を置いて一九二四、二五年にも小治郎の関係した同種の講習会が開かれていること、二五年には東京家事講習所を創立して恒常的な講習会を開設し、雑誌「家事及裁縫」を刊行し始めてからはこの種の講習会を雑誌社の重要な事業の一つとして行っていることなど、その後の経過を勘案してみると、この年の婦女新聞社の夏期講習会は、小治郎の生涯における貴重な経験の一つだった。

右の講習会終了後、小治郎は講習会参加者中の有志三七名を引率して富士登山をした(「婦女新聞」第一一六〇、六一、六二号)。その健脚ぶりをまざまざと知らされる。

それにしても、夏期休業中のこととはいえ、小諸商業学校に勤めたままでのこの活躍ぶりには驚かされる。

地方の教育会あるいは雑誌社や私立学校が夏期に教員を対象とした講習会を開く試みは以前から見られたけれども、婦女新聞社としては初めての企画であった。初めての講習会が大きく成功した要因は、二三年余の歴史を誇る婦女新聞社主催というネーム・バリューもさることながら、当代一流の学者・文化人をそろえた婦人文化講習会の豪華さと、女性教師、特に裁縫教師の間で急速に関心が高まりつつあった洋服裁縫

の実技講習を取り上げた先見性にあったのであろう。

洋装化のはしり

大正期から昭和の初年まで、子どもたちは男女ともに和装だった。小治郎の生家のある村上小学校を一九一八(大正七)年三月に卒業した赤羽要は、当時は「みんな一律に和服とぞうり、またげたばきでした。和服と書けば至極結構に考えられますが継ぎはぎだらけの粗末なものが多かったです。ことに男女生徒を通じてパンツ、ズロース着用の方一人も無かった事など今昔の相違著しいものがあるのは驚きの外ありません」と証言している(「村上小学校百年誌」)。

子どもの服装の洋装化も都会から始まった。婦女新聞社主催の講習会が開かれた一九二二(大正十一)年当時、東京の山手のある小学校三年生男子は、四七名中九名が洋装で、三年後には同じクラスの洋装は二八名になったという(家永三郎「日本人の洋服観の変遷」)。同じ二二年に和田典子が母親手縫いの洋服を着て京都府下の小学校に入学した時、洋装の子どもは村では彼女一人だったという(朴木佳緒留「民主的家庭科教育を求めて(第二回)」『家庭科研究』一九九一年六月号)。昭和期に裁縫教育界の指導的位置に立つ成田順が「裁縫科の時代化」を書いたのは、一九二四年だった。小治郎は少しずつ動く時代の変化に敏感だったと言えよう。

大人の女性≠婦人の洋装化はもっと遅れていた。一九二〇

(大正九)年夏、女性の政治活動を禁止した治安警察法五条の修正要求などで議会請願にとびまわっていた新婦人協会の平塚らいてうと市川房枝が、身軽に活動するために洋服を着始めたことはよく知られる。これは、当時としては大きな勇氣のいることだった。七年近いアメリカでの生活を経て一九二〇年秋に帰国した杉野芳子は、東京の赤坂あたりの町を洋装で歩いていると、「西洋人だ! 女の西洋人が来た!」と子どもたちにはやしたてられ、大人たちもじろじろ眺めるので、素朴な無言の圧迫に抗し難く、一時期は寝巻きと部屋着以外は和服にした時期があったと回想している(杉野芳子「炎のごとく―自伝」)。その杉野が洋装の普及に寄与しようとして「ドレスメーカースクール」を開設したのは一九二六年四月である。ここに洋装を習いに来た娘たちが、卒業制作の洋服を着て登校することに抵抗したという時代だった。

上京

小治郎は、二年七か月勤めた小諸商業学校を一九二三(大正十二)年四月三十日付で退職した。五十三歳になっていた。当時としては引退しても不思議のない年齢であったけれども、小治郎にとっては期するところがあっての退職であったように思われる。退職後間もなく(五月か)、小治郎一家は上京した。この年八月には、婦女新聞社主催の観光団を引率して日光に行っている(「婦女新聞」第一二二四号)。